
あのこがここで、このこがあのこ。

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あのこがこのこで、このこがあこのこ。

【Nコード】

N7953X

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

ある事件で家族を含む親族を全員失ってしまった少女、サーシヤ。ある人物の差し金により、少女は異国へ渡る。そんなある日、少女は犬を拾う。少女はその犬の事が好きだった。つかの間の平穏と知りながらも、少女は犬と共に過ごすのだった。

両親に捨てられてしまった少年、和樹。少年はある日、都会の真ん中でタカを拾う。「え？ タカ？ マジで？ ホンモンか？」しかもなぜか高校の同級生にいじめられていた。「おい、肉食だろ。寧猛なんだろ？ しっかりしろよ！」思わずタカを助けてしまい、

それからタカにつきまとわれるように。「野生に帰れ！」

そんな生まれも育ちも全く違う、二人と一匹と一羽の話。

第一話（犬視点）（前書き）

最初が犬視点。少し分かりにくい内容になるかもしれませんが。それでもよろしければ、お願いします。

第一話（犬視点）

目の前にある光りを追いかけた。

届くかどうかは分からない。届かなくたって構わない。

だって、それは手に入れるにはあまりにも繊細な光りだった。
繊細なその光りに恋い焦がれ、ただひたすらに追い求める。

あまりにも滑稽だった。

笑ってしまう。こんな汚れた自分が、あんな綺麗なモノに触れようなど、笑うしかない。

でも、だからこそ焦がれる。

どうか、一度でもいいから、振り返ってくれ……！

*

人々の熱気が立ち込めている。目を開けると、そこはどこかの街の大通りだった。見慣れない街。なぜ自分は今、ここにいるのだろうと考える。しかし、ここに至った直前の記憶を思い出そうにも思いつく事が出来ない。

「んー……とりあえず、どっか高い所で昼寝でもするか」

考えても始まらない。特にやりたい事もなかったので、いつもの様に昼寝をする事にした。高い場所を探すために周囲を見回す。そこで違和感に気付いた。

（んー……いつもよりも目線が低くないか？ それともこの街は全

てが大きめに作られているとか？　つーことは、ここは観光名所だったりするんかね？）

どうでもいい事を考えながら、街中を四足で歩く。十歩ほど歩いた所で、違和感を覚えた。

（なんだろ、みんなやたらと身長が高いな。これが普通だとしたら、俺、幼児くらいの大きさしかないよな）

内心、首をかしげながらも歩き続ける。時折、子どもや大人から危ない視線を感じるが、それらは全て無視した。気にしても仕方ないし、そもそも他人なんか興味ない。

鼻歌を歌いながら適当に歩いていると、ある一点に目を奪われた。

それは華奢な少女だった。

簡素な、だが清潔な服に身を包む少女は、不思議と華やいで見える。色素の薄い金の髪、光りを弾くような白い肌。そして、優しい碧の目。ただそれだけの事なのに、そこだけ別の世界のように思えた。

気が付いたら少女の元へ駆けだしていた。引き寄せられたと言ってもいい。それほどまでに、少女に惹かれた。

少女は驚いたようにこちらを見る。花の様な笑顔を浮かべた。

「あら、可愛いワンちゃん」

少女はしゃがみ、俺の頬をぐしゃぐしゃと撫でる。幸せだった。そこでふと、違和感に気付く。

（ちょっと待て、なんか色々おかしくないか？　それに、ワンちゃ

ん？)

とりあえず少女の傍らを陣取って歩きながら、内心で首をかしげる。犬なんて見回す限り、どこにもいない。

(なにかがおかしい。おかしいが、なにがおかしいのか分からん)

そういつた類の物は放っておけばその内わかるだろう、と一先ず問題を棚上げにする事にした。しばらく歩くと少女は喫茶店へと入る。店員が日本語ではない言葉で少女に話しかけるが、少女は言葉が分からないらしく困ったように微笑みを浮かべていた。

とりあえず店員に案内された場所は、外のテラスのような所だった。少女の傍らに寝そべり、少女を上目で見つめる。

(とりあえず、可愛すぎる)

一目惚れで間違いない。むしろ、否定する要素が欠片もない。これは、テンションが上がるな！と一人で勝手に盛り上がった。ふと、店のガラス窓を目を向け、そこに映ったものに眉を顰める。

(誰だよ、飲食店に犬なんか連れ込む奴は……)

その犬の傍らには、例の少女がいた。

(うん。ガラス窓に映っている姿も可愛いな)

そこでようやく違和感に気付く。

……………え？

俺の姿が窓に映っていない。俺がいるはずの場所に別のモノが映っている。

俺はゆっくりとガラス窓に近づく。窓に映る少女は店員にメニューを見せながら注文を頼んでいる。俺は気にせず、ガラス窓に手を当てた。

ふに。

思わず自分の手の平を見つめる。そこには肉球があった。どう見ても肉球だった。

そして鏡に映っているモノは――犬だった。

「う、嘘だ――！」

第一話（犬視点）（後書き）

次は少女^{サーシャ}の視点となります。

基本的にサーシャの話はシリアス。和樹の話はコメディになると
思います。落差が激しいと思われませんが、よろしく願います。

第2話（サーシャ編）（前書き）

内容、始めから重いです。すみません。

第2話（サーシャ編）

サーシャは足元に戻って来た犬を見て、困ったように微笑む。

「どうしたの、急に吠えたりしたら追い出されるよ」

店内に戻った店員からの視線が痛い。けれど、そういった類の視線にサーシャは慣れている。故郷で嫌というほど、憐れみと恐れの目を向けられたからだ。

？サンベルクの虐殺？

世間ではそう呼ばれている事件での、唯一の生存者。その事実がサーシャⅡランツベルクを孤立させていた。なぜなら、サーシャに悪魔の所有印が付いていたためである。

悪魔の所有印とは、通常、深い業を持つ者に現れる物だ。サーシヤは事件の後、その所有印が浮かんだのである。そのため、サーシヤは？悪魔に魅入られた娘？として見られていた。ランツベルク家が大貴族である事を差し引いても、人々からは疎まれる。有り余るほどの財産は残っているが、傍には誰もいない。

「あなたは私の傍にいてくれるかしら」

サーシヤは犬に聞くが、当然犬は答えない。不思議そうにサーシヤを見上げている。

「動物の類には嫌われているはずなのに、なぜかしら」

犬は首をかしげた。

この犬は狼と姿が似ている。全身を漆黒で包み、瞳も闇のように

真つ黒だ。闇のように深い目をしているが、不思議と怖くはない。

犬は立ち上がり、サーシャの膝に顎を乗せた。撫でてとねだるように顔でサーシャの膝を擦る。サーシャは微笑みを浮かべ、犬の頭をなで、頬をなでた。

「よしよし、良い子だね」

千切れんばかりに尻尾を振る犬に、胸の奥がくすぐられた。

（か、可愛すぎる）

椅子から下り、犬と視線を合わせる。不思議そうに首をかしげる犬に、サーシャは抱きついた。犬は温かくて、毛は柔らかい。犬はしばらく硬直していたが、すぐに鼻を鳴らしてサーシャのにおいを嗅ぐ。その息がサーシャにはくすぐったかった。

犬とじゃれていると、店員が注文した紅茶を持って現れる。サーシャは立ち上がり、椅子に座って紅茶を楽しんだ。サーシャの国の物と比べると格段に質が落ちるが、その点は始めから妥協している。鞆に入れている銀で作られた懐中時計を取り出す。約束の時間はもうすぐだ。

サーシャは軽く息を吐く。

「おや、こちらにいらっしやいましたか。サーシャ」

サーシャは顔を上げ、その人物へと目を向ける。紳士服に身を包んだ壮年の男がそこにいた。

「お久しぶりですね、堪草^{たんそう}」

「お久しぶりです。お元気そうでなによりです」

堪草と呼ばれた男は微笑みを浮かべた。

「あなたにご協力願えばと思ひまして、こんな東の辺境までお呼び立てしまいました。西と違って、こちらは賑やかでしょう？」

「そうですね、違う意味で賑やかだと思います」

サーシャは苦笑を浮かべる。

東の国は西の国よりもずっと貧しい。大通りであれば安全だが、一步裏の道へ足を踏み入れると無事では帰ってこれないだろう。この国では足元にいる犬、果ては鼠までもがこの国では食料とされるのだ。犬を食べる習慣のないサーシャにとっては恐ろしい話でもあった。

堪草もサーシャの言外に示した意味を悟ったらしく、苦笑いを浮かべる。

「それは、失礼いたしました。私の国はここから南へと行った小さな島国ですね。そちらはこの国とは違った明るさですよ。——少なくとも、戦争に勝っている今は」

「そうですね」

サーシャは手元の紅茶に目を落とす。

（どちらにしても、私にはあまり関係のないこと）

「それで、どのようなご用件のですか？ あいにくと、本国からは何も聞いていないので、現地で直接聞くしかありませんでしたの」「やや、そうでしたか。それではこの国で起こっている事件についてお話ししよう」

堪草は近付いてきた店員にコーヒを注文した。サーシャは冷めてきている紅茶に手を付ける。軽く口に含み、口の中で転がした。ふと、足元の犬を見ると、犬は堪草を睨みつけているようだ。身体はサーシャの足にぴったりとひつつき、油断なく堪草を見据えていた。

(……なんか、妬けます)

サーシャは動物に嫌われているが、こうして睨まれる事はないのだ。だから、そうした感情でも動物に視線を向けられる堪草が羨ましかった。

サーシャは犬の頭をなでる。犬は気持ち良さそうに目を細め、されるがままになっていた。

「おや、その犬は一体どうしたのですか」

サーシャの足元にいる犬に、堪草はようやく気付いた様である。

「先程、見つけたのです。おそらく野良犬だと思いますけど、礼儀正しいし、なにより私に懐いてくれます」

「それは珍しい事もあるんですね。悪魔をも恐れる犬ですか。いやあ、もう褒め言葉しか出ませんよ」

サーシャは苦笑した。堪草は気の良い男だが、少々、感情の機微に疎い。本人の気付かぬ内に、人が傷付くような言葉を平然と言ってしまうのが難点だった。

そんな事を考えていると、唐突に犬が吠えだした。堪草を睨み、威嚇するように吠える。堪草は犬の勢いに呆気にとられた。

「これはこれは、ずいぶんと良い騎士^{ナイト}を見つかりましたね」

堪草は感嘆するように呟く。サーシャは微笑んだ。

「ええ。そうですね」

サーシャは犬の頭を宥めるようになでる。誰かに庇ってもらったなど、久しぶりの事だった。

第2話（サーシャ編）（後書き）

しばらくサーシャ編が続きます。おそらくタカ視点になるまでずっとサーシャ編です。なので当分重いと思います。コメディを望んでいる方、本当にすみません。和樹編になるまで重いです。その分、和樹編でははっちゃけます。……多分。

第3話（前書き）

ファンタジーというより、これではホラー色が強くなっている気がします。一部グロテスクな描写があります。コメディを期待されている方、本当に申し訳ありません。

第3話

「それで今回の事件は一体どのようなもののですか」

サーシャの言葉でようやく本題を思い出したのか、堪草はポンと手を叩く。

「そうでしたね。サーシャに協力をいただく事からも察していただけると思いますが、今回の件はおそらく異形の者たちが関係していると考えられています」

異形の者とは、この世では到底考えられないような者の事を差す。例えば吸血鬼、そして悪魔。西洋で最も頭を悩ましているのが、この二種類である。もっともこれだけに限らず、狼男、雪女、魔女、魔法使いなども含まれている。正式な分類は全くされていないが、おおよそ常識の範疇から越えた者を？異形の者？と総称されるのだからなみに聖・邪と関係なく？異形の者？とされる。

「どういった類の者のですか。場合によっては私の力では解決できないかもしれません」

「いやあ………なんというか、妙な事件なのですよ」

どこか歯切れの悪い堪草に、サーシャは呆れたように声をかける。

「妙な事件なのはいつもの事ですよ。それに、説明してくれなければ状況も分かりません」

それもそうですね、と堪草は呟く。胸ポケットから白黒の写真を取り出した。

「こちらが被害者の写真です」

「これは……いつ頃のものでしょうか」

写真には、骨に皮が引つ掛かっているだけの死体が写っている。その割に服がそれ程、劣化していないのが気にかかった。

「これは一昨日発見されたものです。被害者の特定は出来ていません。まあ、この国では人が死なない日の方が珍しいのですが」

「だとしたら、なぜこれを事件だと思ったのですか」

分かりきっている事だとしても、自分の中だけではただの推測にすぎない。サーシャは確認も兼ねて堪草に尋ねる。

堪草は頭を掻きながら答えた。

「いやあ、やつぱりどうも合わないんだよね。死体の状態と状況がそもそも、この死体はほとんど皮だけの状態なんだよ。年月が経ってこういう状態になったんなら分かるんだけど、この死体の皮は、まだハリがあるんだよ。不自然なまでに瑞々しい。通常ではありえない。」

さらに状況が変なんだよ。土の中から発掘されました、とかならまだ分かるんだよ。だけどこれは、普通に捨てられている感じだったんだ。ポイツと適当に捨てられた感じだね。状態も良過ぎる事から、最近の物だって分かる。

何件も死体を取り扱ってるけど、こういったモノは正直気味が悪い。これがもし続いたらと思うと、夜も安心して眠れないよ」

堪草の正直な言葉にサーシャは苦笑いした。だが、気持ちは分かる。サーシャも以前であれば、直視したくないモノだ。

だが、今は違う。サーシャはどちらかといえば、異形の者と同じ

部類に入るのだ。気持ち的には人間でいるのだが、周囲はそう見ない。唯一、堪草だけはサーシャを人間として扱っている。堪草には娘がいて、どうもその娘と重ねて見てしまつらしいのだ。

「そうですか。何か手掛かりになるような物がありますか」

「いいや、これが初犯なんだよ。もつとも、これが彼ら流の食事なら、これから増えるだろうけどね。あーあ、厄介事ご免だよ」

サーシャは思わず笑みをこぼす。堪草といると肩から余計な力が抜ける。気張らなくて良い。

足元にいる犬が不満気に堪草を睨みつけていたが、サーシャは犬の頭を撫でてそれを宥める。犬は渋々ながらも落ち着いたようだ。

「そうですか。では、何か新しい事が見つかったら連絡してください」

「ああ、頼むよ」

サーシャは立ち上がり、堪草に軽く会釈をしてテラスを出ていく。その足元には当然のように漆黒の犬が寄り添っていた。

「手掛かりもなし。せめて遺体を見る事が出来たら何か分かったのかも知れないのに……」

異形の者が関わったと思われる死体は、発見次第、火葬にされる。もはや跡形も残っていないだろう。放棄された場所に行こうかと思つたが、場所を聞くのを忘れてしまった。

（少し、浮かれすぎたのかも知れません）

サーシャは軽く息を吐く。隣の犬が心配そうな視線をサーシャに

向けた。しかし突然、顔を跳ね上げ、正面を睨んで唸り声を上げる。サーシャも正面へと目を向けた。そこには人混みをすり抜けるように、頭から闇色の外套を被った小さな者が現れる。腰が折れ曲がっている事から老人である事は推測出来るが、それ以上の事は分からなかった。

（なんなの……？）

目の前にその人物が現れ、反射的にサーシャは息を飲んだ。

「ふえふえ、見つけたよ。お前さんは彼の方のお気に入りだろ？
確かに美しい造りをしてるねえ」

しゃがれた声が外套の奥から聞こえる。サーシャは身を固くした。足元では犬がサーシャに寄り添い、外套の人物を威嚇している。

「お前さんの探し人、あたしゃ知ってるよ」
「探し人？」

外套の奥で何かがにたあ、と笑ったのを感じた。サーシャの肌は本能的に粟立った。

知っている。この感じは、知っている。

（あの人よりも、遥かに格は下。けれど間違いなく、この人は異形の者——）

サーシャは相手を睨みつけた。相手は外套の奥で、それすらも嘲笑うかのように身体を震わせる。

「あの事件の犯人、探しているんだろ？ 手伝ってやってもいいよ」

「えっ？」

サーシャは身を一步引く。それに追い縋るように外套が一步前に出た。

「大丈夫だよ。別に取って食いやしないさ。それに言うたろ？ 異形の者は異形に任せろってさ。少なくとも、裏ではそう言われてるはずだよ」

サーシャは身体が急速に冷えていくのを感じた。足元にいる犬の体温しか感じられない。

（――怖い）

サーシャはまだ、あの時の事を克服できていないのだ。未だに、こうして異形の者と相對しても身体が縮こまる。

「わ、私は……」

外套の袖が伸び、サーシャの頬に触れようとする。サーシャは反射的に身をすくめた。恐怖で身体を動かす事が出来ない。足が地面に縫い付けられているかのように、動く事すらままならない。

（誰か……助けて――）

サーシャはこれ以上見る事が出来なくて、目を閉じた。

第4話

耳を塞ぎたくなるような轟音が響く。断続的なその音はサーシャの足元から聞こえてきた。サーシャが足元に目を向けると、そこには漆黒の犬がいる。その犬がサーシャに手を伸ばす人物を吠えさせているのだ。

「うるさい犬だねえ」

外套の奥で不機嫌そうな声が聞こえてきた。サーシャは相手の意識が逸れている内に、一步後ろに下がる。外套の人物もそれに気付いたのか、手を下ろした。しかし、手が引いても犬は吠え続けている。相手は吠え声を気にする事なく、サーシャを見ていた。

「つまらないねえ。だけど、協力はするよ」
「なんで」

サーシャは外套の奥を睨みつける。しかし、身長差があるため外套の中は決して見えない。

「なんで、私に協力しようと思うのですか。あなたの目的は一体、なんなのですか」

基本的に異形の者がこうした申し出をする時は、なんらかの理由がある。くだらない理由で協力を申し出る事もあるが、そんな事は稀だ。むしろ、それ以外の理由の方が多い。

外套の奥でふえっふえっ、と笑い声が響く。

「なあに、そんな難しい事じゃあないよ。ちよいと血を貰うだけさ」

その言葉にサーシャの全身の血が音を立てて引いた。一気に体温が下がったのが分かる。しかし不思議と汗が止まらなかった。

「知っているだろう？ あの方の洗礼を受けたあんたの血は、あたしらにとつては極上の食材なんだよ。それを見逃すと思うのかい？」
「……………」

「断ろうと思わない方がよいよ。今回の奴は、あんたのような奴には荷が重い。今までだって小物しか倒して来なかったんだろう？ 知ってるよ。あんたはただ、あの方を探し求めているだけ。あの方を滅する事は始めから考えていない。違うかい？」

違う、という言葉は喉に引っ掛かって出てこない。口からは掠れた様な声しか出なかった。しかし、そんな事を考慮してくれる相手ではない。現に、相手は肯定として受け取ったようである。

「じゃあ、契約成立だね。早速、探してやるよ。お姫さま」

外套の人物は腰を折り、一瞬で人混みに紛れた。それと同時に、サーシャの左手に痛みが走る。火傷のように肌が焼かれる感触がした。

「——っ」

左手を見ると、そこには契約完了を示す紋様が浮かんでいる。淡い緑色をした紋様は契約者同士にしか見えない。日常生活で不便はしないが、同時に契約からは逃げられない事を示していた。こうなると、簡単に破棄する事は出来ないのである。

「なんてこと……」

微かな鳴き声が聞こえ、足元を見る。先程まで吠えていた犬がサーシャを慰めるように寄り添い、心配するようにこちらを見上げていた。サーシャは膝を折り、犬に抱きつく。犬は先程までの威嚇が嘘のように落ち着いている。サーシャは犬の背を撫でた。

「ありがとう。でも、心配しなくても大丈夫よ」

犬に向かって微笑みを浮かべる。犬は不思議そうに首をかしげていた。

「本当に、大丈夫なのよ」

サーシャは立ち上がり、目を閉じて耳を澄ます。人々の喧騒が波のように引いていく。そしてゆっくり目を開けると、そこには違う世界が広がっていた。

いや、正しくは先程とは数分変わらぬ同じ世界。ただ、そこにあるべき人々が誰もいない。がらんどうの世界。生き物の生気を一切感じさせない世界である。それは精巧に作られた模型の样にも思えた。

サーシャは足元に目を向ける。そこには何もいないが、仄かな温かみがあった。

「ここでお別れね」

サーシャは誰もいない世界を歩き出す。

屋台や露店には出来たてのように商品が並んでいるが、香りが漂ってくる事はない。道端に咲く花々はどこか色褪せて見える。先程まで、確かに人が存在していた事を主張するかのように、全てが配置されているのだ。

サーシャは再び目を瞑り、眉間に指を当てて集中する。目を開くと、世界には青い筋が無数に尾を引いていた。それは誰かの足跡のようにも見える。サーシャは軽く息をついた。

「……本当に、初犯なのかしら」

無数に尾を引く足跡は、この街に非常に馴染んでいる。足跡は大通りだけでなく、この土地の者しか使わないような裏道も通っており、複雑になっていた。とても一日や二日で出来るような物ではない。

（それでも、私に選択肢はないのですよね……）

契約を破棄するための方法はいくつか存在する。

- 一つは、契約者同士が破棄する意志を持った場合。
- 一つは、契約条件を満たす事が出来なかった場合。
- 一つは、始めから契約条件が誤っていた場合。

契約と言っても、穴がない訳ではない。契約する側は一方的な条件を突きつける事が出来る。しかし、それは双方の理解があつての物ではないのだ。言い回しや違う受け取り方をすれば、契約条件を変えてしまう事も可能である。

もっとも、今回の契約条件は単純明快。サーシャの捜査に協力する、というものだ。

だがそれ故、穴がない。

なぜならどのような形で協力する、とまでは明言していないためである。どのような形であれ、協力と見える行為をされれば終わる。言い訳が出来なくなる。

だから、サーシャは先手を打つ事にした。しかし――

（これでは、すぐに追う事が出来ません）

そんな事は始めから考える事が出来る範囲である。もちろん、打開策もあった。しかしその打開策は、正直あまり乗り気がしない。

（でも、やるしかないんですね……）

サーシャは軽く息をつき、意識を切り替える。

サーシャは目を閉じ、視界を閉ざした。自身の中にある、ある感覚に意識を集中させる。

（――大丈夫――見える――全部――目の前にある全ては――全て私の支配の中――この世界に存在する全ての音は――全て私の意識の内――閉ざせ――全てを――私は――空間を支配する――）

この世界にある、ありとあらゆる情報が集まる。小さな囁き声から、誰も入れないような隙間の映像すら流れてきた。限定された空間にも関わらず雑音が多く、なにもない場所であっても情報として寄せられる。吐き気すら覚えるほどの情報の渦の中、サーシャはただ一つの求めて探し続けた。

長いようで、短い時間が流れる。

「――見つけた」

サーシャはゆっくりと目を開く。その目は――深い紫色をしていた。

第五話（犬視点）

唐突に近くにあった温もりが消えた。慌てて見ると、そこに少女——サーシャの姿はない。忽然と姿を消してしまったのである。

俺は急いで周囲を見回し、鼻を鳴らして臭いを探すが気配すら感じられない。まるで神隠しに遭ったかのように、唐突に消えたのだ。

『おい、どこ行っただつ！』

声を上げてサーシャを探すが、やはり見つける事は出来ない。もしや、先程の怪しい人物がサーシャに何かしたのかも知れない。そう考え、怒りが沸々と湧き上がってくるのを感じた。

『サーシャ！ どこにいるんだ！ 近くにいるなら返事しろ！』

どれだけ声を上げても、それは意味のある言葉にならない。周囲から鬱陶しそうな視線を向けられるだけだった。

『サーシャ！ サーシャ！』

微かにサーシャのにおいを嗅ぎ取り、それを辿って走り出す。その方角に近付くにつれ、非常に嫌な気配が漂ってきた。まるで空気が粘着質になったかのように、肌に纏わりつく。非常に不快だったが、足を止める訳にはいかない。

（なんなんだ、この気配は。気持ち悪い）

しかし、サーシャはその先にいるのだ。早く救い出さなければならぬ。

(……サーシャ、無事でいてくれ)

嫌な予感しかしなかったが、俺はサーシャのために走った。

第五話（犬視点）（後書き）

とても短いです。すみません。

第6話（サーシャ編）

サーシャは色彩に欠ける世界を走っていた。精巧に作られたはずの世界は、やはりどこか違和感を覚える。

（やっぱり、この世界嫌い）

サーシャは目的地に向けて脇目も振らずに走った。ここは誰もいない世界。一人ぼっちの世界。唯一、ある生き物がいる場所へと向けてサーシャは走る。

目的の場所に近づくに連れ、建物が目に見えて減っていく。舗装された道が途切れ、地面が露出していった。どんどん街から離れていく事にサーシャは気付く。

（古い足跡は街の中にある……という事は、元は人だったのかしら）

サーシャの追っている足跡は全て新しいモノである。それ以前のモノは全て街の中にあるのだ。そうすると、サーシャと同様に異形の者に堕ちた存在という事だろう。仮にそうであるとすれば、厄介な事になる。

人から堕ちた異形の者は、タチが悪い。人であった時の記憶があるせいか、人であった時と同じように生活する者が多いのだ。サーシャのように、異形としての性質が出にくい者であれば人としての日常生活を送る事が出来る。逆に異形としての影響を強く出る者であれば、一大事だった。

（人喰い系の異形の者となると、もっと被害が大きいはず。なのに被害がまだ少ない、という事は堕ちて間もないという事かしら）

だとすれば、憐れである。

人喰い系の異形は、特に食に対する渴望が強い傾向にあるのだ。さらに厄介な事に、我慢すればするだけ飢餓感が増していく。他の物で代替しようにも本来の主食を食さない限り、飢えがなくなる事は決してない。

そして我慢の限界を超えた時、理性を失う。その上、反動で見境なく襲うようになるのだ。

サーシャは速度を緩め、呼吸を整える様にゆっくりと歩き出す。今やサーシャは街から完全に離れ、地層に沿って歩いている。断層は大きく、サーシャの倍以上の高さほどあった。

この土地は元々、何かの発掘調査が行われていたらしい。露出した地層は抉れるように掘られ、無残な姿を露わにしている。左右を壁のようにそびえ立つ断層により、自然の通路が造られていた。

「ようやく、見つけました」

断層に囲まれて行き止まりとなる場所に、目的の相手はいた。かつては立派であったであろうと分かる服装は、今では襤褸のようになっている。憔悴しきった顔の頬はこけ、生きているのが不思議という風体だ。実際、相手はふらふらと幽鬼のように立ち上がると、焦点の合っていない目をサーシャへと向けた。

「……あ……久しぶり、の人間か……？」

掠れた言葉を呟く相手は、縋りつくような目をサーシャへと向ける。その目の奥に微かに欲望が燦っているのにサーシャは気付いた。

（これではもう、戻れない……）

サーシャは内心で溜息をつく。そして叶わない希望を抱いていた自身にサーシャは自嘲した。

「半分当たりで半分外れという所です。私は、あなたを止めに来ました」

サーシャは額に手を当て、身体のを抜く。その目はいつもの碧に戻っている。それと同時にサーシャの目に映る景色に色が戻って来た。生命の息吹をようやく感じる事が出来る。

サーシャの気配の変化に気付いた相手は脱力した。

「なるほど、キミも同族か……」

「残念ですか？」

「いや、終わらしてくれるなら、誰でもいいさ……」

唐突に相手は胸を掻き毟った。よほど強い力なのだろう。一気に服は襤褸切れと化した。露出した皮膚も爪で傷付き、赤く染まっている。

「ああ……肉が……肉が喰いたい……！」

自らの食欲を抑えるために、相手は身体のを至る所を掻き毟った。

（人を食べたから少しは理性が戻っているようね……でも、限界も近いわ）

人喰いの飢餓感は麻薬と同じだ。ただ普通の麻薬と違い、一発で人ではなくなる。二度目はないのだ。

「……もう、人なんて食べたくない……」

聞いているこちらの胸が苦しくなるような、切実な願いだった。
痛みか、それとも己の内の葛藤か、こけた頬に涙が伝う。せめて
理性など飛んでしまえば苦しむ事はなかっただろうに。

「あなたの願い、叶えてあげます」

「その必要はないよ」

サーシャは振り返り、断層の上に新たな乱入者を確認した。

それはサーシャと強引に契約を結んだ異形の者であった。サーシ
ヤは異形の者を睨みつける。

「あなたの出る幕はありません」

「それは困るよ。じゃなきゃ、契約が成立しないからね。——知っ
てるかい？ その男、そんな事言ってるけど、最初に喰ったのは己
の女なのさ」

異形の者は断層から飛び降り、重みを感じさせる事なく軽やかに
着地する。異形の者であれば造作もない事だが、サーシャは違和感
を覚えた。

（もしかして、外套の中は……）

今は考えても仕方のない事だ、とサーシャは考えを意識の外へと
追い出す。

「それは改めて確認する様な事ではないでしょう。仮にそうだとし
ても、それは今では過去の出来事。今は関係ありません」

「ふえっふえっ、これは異な事を申す。あんたが本当に望むのであ
れば、失った者を取り戻す事も出来るんじゃないかの？」

「夢物語です」

お互い分かりきっているはずのやり取りをサーシャは怪訝に思う。
揺さぶりにすらなっていない。

しかし、サーシャはこの場にもう一人いる事を忘れていた。

「それは……本当なのですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7953x/>

あのこがこのこで、このこがあのにこ。

2011年12月2日19時53分発行